

春夏秋冬

台湾徒然



第57回

台湾マンゴーを日本に

2011年5月の連休明け、今年初めて沖縄マンゴーがセリにかかった。キロ9000円の値をつけたのは、本島北部「おもしろたい(大湿帯)」の平良熱帯果樹園の完熟マンゴー。6月下旬から7月にかけてピークを迎える台湾産よりかなり早い。

現在のマンゴーブームがどこから到来したかは一概には言えない。たとえば、宮崎の前知事の奮闘もあるだろう。しかし宮崎産のマンゴーも、その苗の多くはもともと沖縄から持ち込まれ、平良さんたちを講師に招いて普及させてきたものである。

沖縄から宮崎、熊本にも拡大しつつあるマンゴー栽培。その草分けともいえるのがこの平良良孝さんである。この道三十余年。大正12年の生まれで、現在88歳。いまは経営をご長男の良昭さんに委ねたものの、なおマンゴーへの情熱は衰えることはない。

もとは金融関係の固い仕事だった。

退職後、五十を過ぎてから果樹栽培に乗り出した。目を付けたのが台湾のマンゴー。戦前パラオにいた平良さんにとつてはなじみの果物だった。

沖縄には台湾からパインを導入した経験がある。しかし台湾のマンゴーはすぐには実らなかつた。幾度も台湾・台南県に足を運び、果樹園を巡った。台湾では路地でできるものがないので沖縄でできないのか。

最初にビニールハウスでの栽培を実践したのは台湾出身でうるま市在住の翁長進さん。果樹が花をつけ受粉する2月前後に雨が多いことが結実を阻害していたからである。

翁長さんと提携しながら、やんばるの同志8人が北部マンゴー栽培研究会を結成し、試行錯誤を続けた。28年前のこと。現在この「八人の侍」のうちご存命なのは平良良孝さんと宮城長助さんの二人だけになった。

雨のほかは日当たりの問題もあった。



日本でのマンゴー栽培と普及に尽力した平良良孝さん・良昭さん父子

陽光を受けないと赤く染まらない。そのためもともと葉っぱの下に垂れ下がるように実っていた果実をひもで吊りあげて万遍なく日が当たるようにした。初めて本州に出荷したのは1986年。台湾マンゴーが完全に日本産の沖縄マンゴーとなったともいえる。

平良さんたちの重要な仕事は苗作りに移る。マンゴーは一つの実に種は一つ。自前の種だけでは再生産できない。台湾から種を輸入し発芽させ、それを台木に接ぎ木するという作業を繰り返した。ときに台湾から3万個の種を運び、県内や宮崎に最高7000本の苗を出荷したという。

平良さんは単にマンゴーの増産だけを目標してきたわけではない。環境を守る農業を心がけ、殺菌剤を全く使わない苦心の方法を実現して、平成16年環境保全型農業推進コンクールで優秀賞を受賞している。

現在流行中の品種はアーウィン(俗称アップルマンゴー、台湾では愛文)という。マンゴーはインドあたりが原産。米国でアーウィン種が開発され、ハワイを経て台湾にわたり一世を風靡するようになる。そのマンゴーが、いま日本中に普及するようになったのである。

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
ノンフィクション作家。著書に『台湾・霧社に生きた』、『台湾先住民・山の女たちの聖戦』、『タロキ峡谷の閃光』(以上現代書館)、『台湾革命』(集英社新書)、『明治の冒険科学者たち』(新潮新書)など。元日本軍人軍属の最期の声を綴った『台湾戦後65年』<http://www.taiwansengo.jp/>を更新中。